

縄文時代の子どもたち

弘前大学教育学部附属小学校 中井 太陽

「大発見！謎の縄文土器」

ぼくは、れきしの本を読むのが好きで、中でも旧石器時代や縄文時代が好きです。機かいや技じゆつがない時代に、工夫したり協力して、えものをつかまえたり大きな建物を作ったことを考えると、とてもワクワクします。

ぼくのお母さんは、つがる市木造出身です。木造には、世界文化遺産「亀ヶ岡遺跡」があります。木造の駅には、遮光器土偶をまねた大きな像が立っています。汽車が入って来ると、目が不気味に光るのも、ぼくの中で大ヒットです。この本の題名を見た時、すぐに飛びつきました。

少年鑑定団は、発見した土器の一部や土器の中に入っていた石ころなどが、約五千年前に自分たちと同じような子どもがうめた「縄文時代のタイムカプセル」ではないかと考えました。少年鑑定団の校長先生は、「縄文時代の人も、花がさけばきれいだと思うだろうし、みんなで楽しく食事をしただろうし、親は子どもの健こうをねがい、子どもは、自分た

ちで遊びを考えたり、友だちといっしょにこらを走り回ったりしていたのかもしれないなあ。」と言いました。縄文時代の子どもたちも、ぼくたちと同じように走り回って遊んだり、宝物を大事にとっておいたりしていたんだと思うと、なんだかとてもうれしくなりました。

少年鑑定団が、古珍堂という古道具屋でお宝鑑定大会をした時、店主の中山さんが言いました。

「必ずしも高いねだんがつくものに価値があり、安いねだんのものには価値がないわけではない。」

ちよつとはずかしいのですが、ぼくはお母さんに、「これ買って！買ったの百円だから買ってちょうだい！」と、だだをこねたことがあります。そのとき、お母さんはぼくに、「必要な物を買う百円は安いかもしれないけれど、必要でない物を買う百円は、とても高いんだよ。」と言いました。ぼくは、「お母さんのケチ！」と思っていたけれど、少年鑑定団のみんなが古珍堂で自分の「本物の宝物」をさがしている

すがたを見て、自分も「自分が本当に良いと思ったものを自分の目と心で見つける」ことができるようになりたいと思

いました。きっとぼくには、亀ヶ岡遺跡の縄文人の血が流れていると思うから。